

雜 報

■ 母 校 近 況

◇本會編輯幹事であつた勝又藤夫氏は郡製絲會社蠶事所員として本年三月榮轉せられ其後北澤周一氏が編輯主任として執掌せらるゝことゝなつた。

◇遠藤教授は在外研究中の所本年三月芽出度歸朝せられましたが、御歸航の途路不幸にして眼疾を病まれ其後の御經過が少々しくないとの事で誠に御氣の毒にたへません。只今は毎日御出勤の上不相變御研究中であります。

◇佐藤(利一)教授は微生物學研究の爲二ケ年間の在外研究を命ぜられ五月十三日神戸解纜にて獨逸に向はれました。

◇本會會計幹事榊原春彦氏は先般新潟縣長岡市なる鈴木製絲場に御榮轉をせられました。

◇滿一ケ年間工場管理學研究の爲在獨御研究中であつた阿形教授は五月廿八日芽出度御無事御歸校せられ、只今毎日御出勤中であります。

◇井上教授は今回九州帝國大學農學部に於て蠶絲化學の講義を囑託せらるゝことゝなり本年六月下旬約十日間ばかり福岡で教鞭を採られました。

◇今回新築せらるべき蠶絲化學實驗室は愈々七月四日頃から準備に着手し十一月末日竣工の豫定を以て現物理化學實驗室(桑園内)の南方に建つことゝなりました。

◇早川教授は御令嬢と共に六月初旬不幸チフスに感染せられ久敷御入院中でありましたが、今回七月十一日に御退院になりました。誠に御氣の毒に存じます。

■ 會 合

◇昨年十一月下旬、本會は母校創立十五周年を記念する爲に蠶絲科學の第一回學術講演會を開催致しました。其の當時御講演下さつた講師及び演題は次の通りでありました。

十一月廿一日	開會の辭 (蠶絲業の將來)	針塚 校 長
	蠶の化性に就いて	渡邊(勘)博士
十一月廿二日	蠶 桑 化 學	川 瀬 博 士
十一月廿三日	人 造 絹 絲	厚 木 博 士
	絹 絲 精 練 論	古 谷 教 授
十一月廿四日	利潤なき社會に於ける蠶絲經營	早 川 博 士
	製絲と水素イオン濃度	渡邊(綱)博士
十一月廿五日	絹 絲 化 學	井 上 博 士

以上五日間に聴講せられた方は、本會々員三百六十五名、會員外百五十六名、合計五百二十一名の多數に上り、例の道場を會場に宛て意外の盛會でありました。

◇尙同講演會期中二回夜間を利用して聴講生研究報告會を開催致し、第一部會（養蠶業方面）、第二部會（製絲及紡織業方面）に別ちて有益なる多數の報告がありました。同報告の概要は先般上田市海野町蠶絲雜誌社に託して上梓し『蠶絲業研究彙集』となつて現はれました。

◇十一月二十二日 午後七時から本會總會を道場で開催し、來る大正十九年度に於ける母校二十周年記念事業計畫變更の件を協議致し別項（會告）の通り概要決議を見るに至りました。

◇十一月二十三日 午後五時から聴講者懇親會を公會堂に催し、本會々長初め多數恩師各位の御來臨を仰ぎ空前の盛會裡に午後九時頃閉會を致しました。

◇三月九日 午後六時から在田新舊卒業生懇話會を明倫堂に開催し約百十名の來會者あり午後九時頃盛會裡に散會せり。

◇三月十五日 本校第十三回卒業證書授與式後例によりて本會例會を開催し、會計報告などのありました後、森田中央會參事（絲四回）の米國絹絲業に就ての御話があり、閉會後喜久興に於て懇親會を催し、會長初め多數の恩師各位の御參會を仰ぎ愉快に一夕の懇談を盡しました。

圖 消 息

◇本年三月鈴木教吾氏（絲八）は、芽田度東北帝國大學法文學部を卒業せられ經濟學士となられました。

◇京都帝國大學助教授八木誠政氏（蠶三）は今回、昆蟲類（殊に家蠶）幼蟲の成長曲線の生理學的研究を遂げられ、司大基里 畢事 に於て芽田度く理學博士の學位を受けらるゝことに確定致しました。尙氏は今回米國ロツクフェーラー研究所の研究生として且つ文部省在外研究生として八月中旬渡米の途に着かるゝ筈であります。

◇久敷旭絹織株式會社技師をして居られた加美好男氏（絲三）は先年御都合によつて同社を退職せられ近く御發展の御準備中と承はる。

◇例の黃色光線應用の上簇問題で有名になつた白澤幹氏（蠶五）は先般上田蠶業試驗場を退官せられ支那江蘇省立蘇州女子蠶業學校教諭として榮轉せられた。近來支那蠶業の研究が焦眉の問題であるだけ同氏の渡支に對しては多大の期待を有つものである。

圖 會 告

◇大正十四年十一月廿二日本會總會に於ける協議事項は次の通りでありました。

(1) 母校創立二十周年記念事業計畫一部變更の件

(提出の理由)

本會は曩に總會の決議により母校 立二十周年を記念祝賀の爲め協賛會を組織して左記事項の實行を期 することゝ致しました。

- (イ) 本會機關雜誌擴張の件
- (ロ) 本會事務所建設の件
- (ハ) 恩師謝恩の件
- (ニ) 記念講演會及物故同窓生追悼會開催の件

以上の目的を達成せんか爲に本會は既に大正十四年七月より基金の増額に着手し會員各位よりは改正入會金參拾圓に相當する臨時會費を五ケ年々賦納入(毎年二回に分納)を願つて居ります。而して其の使途に關しては

- (a) 本會事務所建設費は増額資金の一部を之に充當し。
- (b) 本會機關雜誌擴張及通常事務に要する費用は右基金の利子と通常會費とによつて之を負擔し。
- (c) 恩師謝恩及記念講演會等に關しては其の規模及實行方法の決定を俟つて之に要する費用はその前年度に於て更めて臨時會費として納入を願ふことに致しました。

従て本會は上記の豫定のもさに着々と其の準備に従事しつゝあつたのであります。が當時、勝俣上田市長、成澤市會議長、三吉米熊博士等の主唱せらるゝ所に因り既に在職十有五周年を閲せる針塚校長閣下の御功勞に對し聊か頌徳の微意を表せんとする企圖に接し、本會幹事會は本會も亦是と相提携して謝恩頌徳の目的の遂行に盡力するの必要あるを認めた次第であります。従て曩に御協賛を願つた恩師謝恩の件は比較的早く其の規模及實行方法を考究するの必要に迫り謝恩に關する事業も自ら擴大せられねばならぬことゝなつたのであります。従て二十周年記念事業の計畫も多少の變更を要することゝなつたのであります。

即ち今回の總會に於て決議せらるべき事項は主として、

恩師の謝恩及頌徳に關する件

でありまして、本會は其の目的を遂行せんが爲めに上田市有志の御後援によつて廣く頌徳會を組織し全國的に之が贊助を仰ぎ、尙本會よりも金壹萬圓を贈出せんとするものであります。

従て茲に御協議の主題となるものは主として次の事項に歸着する次第であります。

即ち、其の酬金方法及謝恩事業計畫如何の件 (以上)

* * * *

同日總會に出席せられたる會員數三百六十五名、委任狀を提出せられたる者百五十五名、合計五百二十名であつて、茲に總會は正に成立するものとなり。先づ幹事長より、議長を委嘱して篠田平三郎氏(蠶一)推舉し、次の如き幹事會の提案の内容を簡單に説明を致しました。

幹 事 會 提 案

- (イ) 謝恩頌徳事業計畫の件

(a) 收 入 豫 算

本會支出負擔	金壹萬圓以下
上田市及小縣郡有志	金貳萬圓内外
其他全國有志	金貳萬圓内外
合 計	約五萬圓内外

(b) 支 出 豫 算

針塚校長記念蠶絲參考館建設費	金貳萬七千圓内外
針塚校長胸像建設費	金七千圓内外
針塚校長贈呈金	金壹萬圓内外
記念祝賀式費及諸雜費	金六千圓内外
合 計	約五萬圓内外

以上は別に組織せらるゝ針塚先生頌德會發起人の協議を経て成立するものであるが、先づ概要を記した迄である。

次に本會は更に二十周年記念事業の一つとして母校在職二十年若くは十年以上の恩師に對して若干圓を計上すること。

(ロ) 本會支出金負擔釐出方法に關する件

第一案 半額は寄附金。半額は基金中より支出する方法。

但し之に就ては二十周年記念事業中事務所建設費の一部を繰延により流用すること。

第二案 全額を基金中より支出する方法

之れに就ては二十周年記念事業中事務所建設費を一時繰延充當する事

第三案 全額寄附金による方法 二十周年記念事業の計畫は従前通り

第四案 全額を別に臨時會費として徴收する方法 (同上)

同上の提案に對し夫々逐條審議の結果(イ)の謝恩事業計畫に對しては之れに賛同し別に組織せらるゝ頌德會の發起人會に對し參考案として本會より提出することに決議せり。尙(ロ)の釐金方法の件に就ても夫々意見の交換ありたる後、多數の希望により第二案即ち全額を基金中より支出する方法に決し、從て茲に三月十五日の總會に於て決議せる二十周年記念事業中本會事務所建設の件を一時繰延となして、今回の負擔に充當することゝなしたのであります。

尙上記の頌德會設立の上は改めて其の趣意書を一般に配布し精細なる計畫の内容を通報することゝなつて居りますから茲には其の大畧を記すことに止めました。

◇次に本會は、昨年十一月の第一回學術講演會の講演集を東京市神田錦町一丁目十六番地明文堂によりて上梓し近頃發刊されました。是れ本會が著作権を獲た第一回であります。

◇又前記の蠶絲業研究彙集を上田市海野町蠶絲雜誌社より出版し同様に本會がその編者

として著作権を有することになりました。

◇次に昨年から御納入を願つて居る臨時會費、通常會費等の御納入に便ずる爲め重ねて納期及方法を畧記しました。

第一期納入

四 月 中 拂 込 期 (爲替又は振替口座利用)

五 月 中 集 金 期 (五月下旬)

會 額 {通常會費 金參圓} 計金五圓也
 {臨時會費 金貳圓}

第二期納入

十 月 中 拂 込 期 (同 上)

十一月中 集 金 期 (十一月下旬)

金 額 {臨時會費 金四圓} 計金五圓也
 {校友會特別會費 金壹圓}

◇如美好男氏(絲三)は舊厩同窓生研究助成の目的を以て金壹千圓を本會に寄附せられた從て只今本會基金中に繰込んで別項目の内に保管中であります。

■ 寄 書

南 滿 の 家 蠶

四月二十五日 河 上 農 夫

滿洲に於ける家蠶天柞蠶等の過去現在及び將來について種々報告致したいことがあります。本日は家蠶について當地の斯業有識者の着眼點をまとめ一般的に申し上げたいと思ひまして拙劣な文をかへりみずペンを取ることにしました。

昨年長野縣片倉組の中堅とする日本蠶絲株式會社が青島より同社の鈴木常務來滿視察の結果關東州内の蠶業に着眼し愈々本年度より桑園を經營し、又旅順防備所跡に絲廠を設置する計畫を立て、又同社の池上俊之氏の談によれば同社が桑園設立の爲め借受けた土地は貔子窩管内にては小楊樹房、唐家房、清水河、各地にて七十町歩、普蘭店管内にては林家屯、臥龍屯、三十里堡、各地に四十八町歩、金州管内にては上家店劉家店にて四十町歩、旅順管内にては龍王塘、半頭窪とに相當面積ある地点を選定し、之等の内本年春解氷期に三十町歩の桑苗植付を了つたそうである。

又本年は金州民政支署殖産課と共同にて鮮人約十人、支那人約十五名、其の他講習生數人等にて桑苗接木をなし約四十萬の桑苗を作る豫定にて只今も盛んに接木をなしつつあり

南滿に於ける家蠶の有望なことは第一都合よろしきは勞銀の安きこと、桑樹の出來榮良好なること、晩霜なきこと、雨量少なく乾燥する爲め蠶兒の發育順調に且つ病氣も少なき爲めに農家の副業に至極適當して居る。唯警戒すべきは多化性蠶蛆蠅の侵入を受け害を被るにあり。然るに之は蠶室に金網を張つて豫防すれば容易に害を免かる。

今從來の試驗を綜合すれば一反歩の桑園成績は五年目に於て春繭約十二貫秋蠶約七貫を得べく之を時價一貫目八圓と見ても百五十二圓は優に取めることが出来る。若し滿洲に於

ける他の農作物に比較する時は次の如くなる。

高粱一天地（日本の三反三畝歩）より平均三石を得るとして時價一石拾九圓相場と見て五拾七圓、大豆收入五圓、合計六拾圓と比較して全く天地の差がある。尤も桑樹仕立に五年を要するとしても初め三年間は大豆の間作をなし得べく且つ三年目の桑葉だけにても右の雜穀農作物に匹敵する位の養蠶はなし得られる。

桑樹栽培は當地に於ては他の作物と勞力の點については何等差異なきも金肥反當約二十圓を要する故に其の比例は大約次の如きものになる（一天地計算）

種 別	金 肥	收 入
高 粱 大 豆	—	62.00 円
桑 園 養 蠶	20円	565.20 円

故に其概略を推知する事が出来る。若し支那農民の間に養蠶業が普及するとせば其の産業の發達に資することは甚大であらう。日華蠶絲會社の豫定は二百圓の繭を單位として計畫を立て、居るが之に要する繭は約十萬貫なれば目下關東州内の産額五千餘貫にては如何ともなし難く最初山東繭を取り寄せて補充する他あるまい。併し一反當り十九貫平地の收繭を標準として十萬貫を得るには約五百町歩なれば其の位の産額は獎勵次第で（遠からず）實現する見込である。同社は目下青島絲廠にて山東繭二十萬貫を消化してゐるが、同地方では農作法依然として舊習を墨守しゐる爲め良繭を得難く且つ政治的障礙などあつて將來は南滿洲の方が發達するであらうと云ふ。猶關東州内農民の人氣は近來著しく向上し就中婦女の勞作に従事するもの數を加へ日給僅かに二十五—三十錢に過ぎず、故に支那人を使用しての養蠶は随分見込がある。唯製絲工女の雇入は通勤の不便（支那の婦女には外泊せざる風習）ありて彼等が工場生活を理解するまでは相當困難があるかも知れない。

桑園仕立については滿鐵會社も多大の期待を有し、既に鞍山にて二萬坪を試作し更に同驛以南の附屬地にも普及をはかつて居るが、復州は最も地味よき場所であり支那官廳の指導よろしきを得ば農家の副業は高速度の發達を見るであらう。

尙日華蠶絲會社の外に最近東亞蠶業會司が蠶種の製造をなすべく魏子窩管内の官有地百六十町歩を借入れ、三ヶ年計畫にて内五十町歩を桑園に其他を柞樹園並に水田にする計畫にて目下盛んに桑苗の植付に従事して居る。嚙に聞けば春蠶種約七萬枚、秋蠶種約五萬枚を製造して内地及び朝鮮に賣捌り積りだと云ふ。之は經營よろしきを得れば有望にて將來必ず見るべき結果をあげるだらうと豫想されて居る。

大正十四年度決算報告

	收 入 之 部
前年度繰越金	573.015 円
本會通常會費（577口）	1.731.000
全上臨時會費（550口）	3.300.000
全上終身會費（8口）	240.000

全上第一期分 (1口)	10.000
十三年度以前會費	12.000
十五年度通常會費 (11口)	33.000
全 上臨時會費 (11口)	22.000
預 金 利 子	63.570
會 報 讓 渡 代	61.240
校友會ヨリ集金手數料	18.000
雜 收 入	6.000
合 計	6.069.825

支 出 之 部

囑 托 手 當	82.000
囑托及小使年末謝禮	15.000
會報第十三號印刷代	610.000
全 上 拔刷代	14.000
全上郵送用帶封紙	4.800
全 上 送 料	30.710
會員名簿印刷代	136.160
全 上 送 料	11.080
廿週年記念事業趣意書	7.800
本會改正規則印刷代	6.000
全 上 通 知	14.420
卒業式後總會通知印刷代	4.200
全上委任狀葉書代共	14.260
十一月總會委任狀	4.900
原 稿 用 紙	12.000
ハトロソ封筒印刷代共	5.000
郵便切手及葉書代	24.800
集金郵便委託書印刷代	21.000
集金郵便手數料	99.600
會 費 督 促	3.320
新舊卒業生懇話會補助	31.600
弔 電 及 見 舞	1.850
備 品 購 入	44.380
事務所備品購入	30.000
雜 費	4.940

第一回學術講演會費用(內譯別項)	886.970
基本金へ繰越	3,322.000
別途積立金	340.000
合 計	5,782.790
差引残高(次期繰越)	287.035

第一回學術講演會會計報告

收 入	ナ シ	
支 出	總 計	886.970
内譯 講師旅費及謝禮		424.410
全 上 接待費		115.680
會場設備費人夫賃共		116.280
速 記 者接待費		2.200
下 足 人 夫 賃		15.200
消 耗 品 購 入		22.100
通 知 及 廣 告 費		79.460
出 張 旅 費		20.00
徽 章		9.700
電 報		2.450
聽講者懇親會補助		48.730
講師へ原稿送附		.810
講演集豫約募集印刷葉書代共		24.150
雜 費		5.800
	以 上	

故宮下雅敏君弔慰金明細

金 五 圓 宛	太田 清藏君	木内 保平君		
金 參 圓 宛	豊部 正味君	三輪 輔君	宮田鐵五郎君	松田 敬三君
	飯島 正胤君	小林 茂樹君	有賀 文雄君	遠藤 文平君
	高田茂重郎君	高木 三治君		
金 貳 圓 宛	高尾 歳次君	清宮 保君	小川 保君	神保 喜久君
	鈴木 誠一君	後藤富次郎君	小林 茂雄君	菅澤 隆三君
	竹内五之助君	森 淳太郎君	濱井 壽夫君	松井 清三君
	土岐 宣治君	小山 庸人君	伊藤 柳作君	高須 兵司君
	松村 季美君	鶴田 定平君	水島由太郎君	林 貞三君
	蒲生 俊興君			
金 壹 圓 宛	丸山俊一郎君	小笠原振一君	依田 武治君	篠原 善次君

水谷 郷一君	竹内眞喜雄君	大箸 政平君	田附卯一郎君
朝長 勝治君	酒井五十三郎君	林部源三郎君	塚田 眞磨君
倉澤 美德君	杉野 壽一君	戸田 耕三君	大町 省三君
北澤 茂君	牧野金次郎君	堀江 尙君	加藤德四郎君
加美 好男君	岡部 彌平君	原田 兵衛君	川合軍之助君
田口 敏夫君	篠田平三郎君	原 亮敏君	唐澤 正平君
森 干城君	黒江 文雄君	稻石 佐一君	鈴木 鍊一君
野澤 泰治君	齋藤 格次君	酒井 末吉君	向山紀元治君
廣瀬清四郎君	磯野 良知君	須田 圭二君	見波 忍君

金 五 拾 錢 也	佐々木峯二君	以 上
内 譚 合 計	金壹百貳拾貳圓五拾錢也	
通 信 費	金四圓五拾參錢也	
爲替取組料	金四拾五錢也	
差引遺族贈呈料	金壹百拾七圓五拾貳錢也	

長男雅敏死亡ノ際ハ多大ナル御高配相受ケ且又御叮嚀ナル御弔問ニ接シ皆々様ヨリ御見舞ヲ賜ハリ難有ク奉深謝候右御禮參趣可申述ノ處乍失禮以書狀御挨拶ノ辭申述度如斯ニ御座候 頓首敬具

大正十四年十一月三十日

下伊那郡大島村 宮 下 美 藏

上田蠶絲專門學校同窓會御中

故宮下万治君弔慰金明細

金 參 圓 宛	的場 小六君	市川 清夫君		
金 貳 圓 宛	櫻井 吉利君	山口 貞周君	川島 甲一君	小山 二郎君
	手塚 雄一君	安井 義忠君		
金壹圓五拾錢也	石川 健丸君			
金 壹 圓 宛	太田慎一郎君	吉田 榮治君	佐藤 金六君	齋藤 菊雄君
	小山 久一君	長池 遊龜君	福島 新吉君	小林 勲君
	河合 英一君	佐藤 種雄君	中村亀四郎君	飯島 輝雄君
	近藤五代治君	須田國之助君	佐瀬 旭君	塩原 克巳君
金 五 拾 錢	三好 彌一君			

計金參拾六圓也

内 金壹圓四拾錢

金四圓貳拾錢

金貳拾五錢

金拾參錢

差引 金參拾圓也

外二錢

名簿郵送料

別葉端書

二百八十枚印刷料

官製はかき

二百八十枚代金

爲替取組料

但シ五拾圓迄の料金

書留郵送料

御遺族贈呈料